

研究発表要旨

第 8 回「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」研究会

日時：2020 年 6 月 6 日（土）、7 日（日）

会場：Zoom を利用したオンライン会議（ホスト：大阪教育大学）

（本研究会は JSPS 科研費 JP17H04538 の助成を受けたものです。）

13:30-14:30 報告①

報告者：楠和樹（京都大学）

報告タイトル：「ラクダの民」の社会・生態史—植民地期ケニアにおけるアウリハン・ソマリ社会の生業、移動性、境界

【要旨】 現在のケニア北部の乾燥地域に初めて生業牧畜がもたらされたのはおよそ 4500 年から 4200 年前のことであり、移動、交換、略奪を通じて南方にも拡散していったとされる。その後、この地域ではガブラ、レンディーレ、サクイエ、ガレーの祖先に当たる集団が家畜を飼育しながら暮らしていたものの、16 世紀頃にボラナがエチオピアから南下してくるとその政治的、文化的、経済的な支配圏のもとに組み込まれた。長期間持続したボラナを中心とした勢力図は、「アフリカの角」から移住してきたソマリと、植民地支配の網の目を広げつつあったイギリス人の存在によって、19 世紀末に転換することになった。本発表で取り上げるアウリハン・クランは、ソマリのなかでも植民地行政に対してもっとも反抗的で、戦闘能力の高い集団のひとつと見なされていたのだが、軍事討伐や武装解除などを経て 1930 年代にはおおよそ現在のテリトリーに相当する地域に落ち着いている。本発表ではアウリハン・ソマリの移住の概要を述べたうえで、植民地政府が彼らの生業と移動性にどのように介入したのか（あるいはしなかったのか）、そして彼らがそれに対してどのように抵抗し、交渉し、受け流したのかを行政資料と口述資料から検討することで、国家と牧畜民の境界形成について考察する。

15:00-16:00 報告②

報告者：中野歩美（関西学院大学）

報告タイトル：北西インドの移動民ジョーギーの集団的特徴：生業と姻戚関係への着目から

【要旨】 北西インドに暮らすジョーギーは、その名がヨーギー（ヨーガ行者）に由来することからも分かるように、ナート派というヨーガ行者信仰の信徒として知られる人びとである。彼らは超自然的な力を持った偉大なグル（師）として、インド各地の民間伝承や伝説などにしばしば登場するが、発表者の調査地では、土地を持たずに野営生活を送り、村の人びとに水や食料をめぐんでもらって糊口を凌ぐ卑しくて汚い下層の物乞いとして、差別の対象となってきた。本発表では、このように牧畜以外の実践を生業としながら伝統的に移動生活をおこなってきたジョーギーたちの移動生活や生業実践の特徴について検討をおこない、そのうえでさらにそうした実践の基盤となっている親族ネットワークの重要性について論じる。

16:30-17:30 報告③

報告者：秋山徹（早稲田大学）

報告タイトル：クルグズ人牧畜社会の構造と特徴

【要旨】 天山山脈のほぼ中央、中国・キルギス・カザフの三国国境にはハン・テングリと呼ばれる高峰

がそびえている（標高 7010m）。その壮麗な山容を、私はこれまでに 2 度目撃したことがある。あるときは麓から見上げ、あるときは飛行機の車窓から下に見た。つまり、私はこの山それ自体に登ったことはない（登る夢を見ることはあるけれど）。私とクルグズ（キルギス）人社会との関係もこれに似ている。参与観察＝フィールドワークにもとづく民族学や人類学、社会学などにも広くアンテナを張りつつも（恥をしのびつつ、たまにその真似事をする）は、私の仕事の基本は文献史学である。しかも、19 世紀から 20 世紀初頭のロシア帝国統治下（近年では 20 世紀から現在にまで風呂敷を広げている）である。いうなれば、＜アウトサイダー＞かつ＜コロニアル＞という二つの条件のもとで、遊牧社会の実像をつかめずに、つねにもやもやとしたものを抱えてきた。2016 年に上梓した拙著『遊牧英雄とロシア帝国』も例外ではない。本書は、ロシア支配の現地仲介者（intermediary）——拙著では「コラボレーター（協力者）」という言葉を用いている——となったクルグズ人首領のバイオグラフィーを、遊牧文明やイスラームとのかかわりも視野に入れつつ、その再構成を試みたものである。刊行後、内外から様々な感想をいただいたが、やはり、著者のもやもや感も読者にも伝わるようで、植民地ポリティクスという次元についてはともかく、果せるかな、遊牧社会の実像が見えてこないといった批判を頂戴した。前置きが長くなったが、本報告は、そうした指摘を踏まえ、自著を批判的に振り返りながら、本科研のテーマでもある＜エスノロジー＞と＜エコロジー＞という観点にも目を配りつつ、クルグズ人牧畜社会の特徴を考えてみたい。